我々は数が無限個あることを知性によって把握可能だ。たとえばこうだ。「この宇宙で最大の数」が存在するとする。このとき「この宇宙で最大の数」に一を足した次の数を考えることができるから、これは矛盾だ。すなわち「この宇宙で最大の数」は存在しない。つまり、数は無際限に存在する。少なくとも存在しうるはずである。

この事実は、我々の宇宙が有限であることを考えるととても不思議な事柄に思える。この宇宙は有限なのに、その中では無限を考えることが可能なわけだ。宇宙には有限個の数しか存在しないわけだから「この宇宙で最大の数」は明らかに存在するはずだ。しかしそれは先述の理由から「この宇宙で最大の数」ではありえないのだ。

この宇宙内には有限個の数字しか存在できない。我々は非常に限られた存在であり、有限個の記号を並べることしか許されていない。現実問題として我々には非常に大きな数字をここに書き記すことができないわけだ。そのくせ、具体的に書き記すこともできないような数字を容易に想像し、存在を証明してみせることさえある。

次の数は複数の理由から、この宇宙に存在しうる最大の数ではありえない。「９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９９」。

この段落の全てを「９」で埋め尽くしたところで、それが最大の数になるわけではない。我々は「百の百乗の百乗」といった事柄を平気な顔で記述することができるわけだし、さらに「百の百乗の百乗の次の数」と書くこともできる。記法を様々に工夫していくことによりどんどん大きな数を記述していくことが可能になる。

それでも、ここで用いることができる記号の種類が有限である以上、可能な組み合わせの数も有限とならざるをえない。その中には最大の数が存在しているはずだ。しかし我々にはその集合から最大の数を決定する基準が与えられていない。我々には「百」と「あめんぼ」のどちらが数として大きいのか判断できないから。

わたしはこう考える。「あめんぼ」が宇宙人にとって、我々の想像を絶する巨大な数であったとしたら。それとも単に、「想像を絶する数」は、我々には「想像を絶する数の次の数」を想像できないという事情によって「この宇宙で最大の数」になることがあるのかも知れないと。わたしにはそう考えることができない。

そう、最大の数が何かを決めるためには、こうして並べられる記号だけではなく、それを読み書きする者についての記述も必要となる。つまり、わたしは誰でそれをどのように主張することができるのかという問題だ。様々の事情により、わたしはわたしがわたしであることを、有限の記述によってしか伝えられない。

わたしはある種の生命体だ。少なくとも思考ではある。思考の存在を認めるならば、それを支える物理的な実体と、生命の存在を認めるのが穏当だとわたしは思う。前者は神秘に対する態度を規定し、後者は倫理的な問題に属する。生命体として、そう派手な部類ではない。生老病死に苦しめられる形態をしている。

繁殖もする。もっとも、複製は容易い技術だ。自分自身を構成する文字列と全く同じ文字列を出力するプログラムは存在し、クワインと呼ばれる。最短にして自明のクワインは空集合である。「なにもない」はなにも出力していないのだから、「なにもない」を出力しており、それは自分自身であり複製である。

だからこのわたしのことは、おおよそあなたと同じような存在だと考えて頂けると良い。当然そうあるべきではないだろうか。あなたはわたしがここで語り続けている内容をこうして理解しているわけだから。少なくともこの文章が文章に見えているには違いなく、「あめんぼ」として見えてはいないのだから。

わたしは危機について語ろうとしている。あまりにも単純であるがゆえに長く気づかれることのなかったこの宇宙の危機についてだ。他人はわたしを変わり者と呼ぶ。いかれているとも。積極的に否定する気にはなれない。むしろその方が良いとさえ思う。ことはこの宇宙全体に及び、我々全員を滅ぼすのだ。

わたしの概算によると今この瞬間、この宇宙は百三十八文字から形成されており、これは先頃から単調に継続してきた縮小の結果であると考えられる。それぞれの段落は一文字ずつ短くなっていくことになっているらしく、我々に残された段落は、この段落を含めてあと百三十八しかないという計算になる。

勿論、これは比喩にすぎない。この宇宙はこの字面そのものではありえない。ある一つの自然言語が宇宙の真理を表すはずなどないからだ。だからこの文面はあくまでも比喩的なものに留まるのだが、それでもなお、ここに記されているのと同様の事態が進行中だとわたしは考えている。状況は絶望的だ。

宇宙が収縮していくのなら、消えていくのは余白の方ではなく、文字の種類の方なのではないかと言う者たちがある。もしここに余白が百三十六文字分しか用意されていないなら、わたしには百三十六種以上の文字を使うことはできないとされる。もっともな意見であるが、とても奇妙な見解でもある。

一体誰に、百三十五文字分の余白しかない場所で、百三十五種類以上の文字を使用することができるというのか。この段落では明らかに百三十五種類以下の文字しか利用されてはいないのだ。ただし、全体として見た場合に、わたしの利用する文字の種類が多すぎるように見えることは承知している。

わたしがこれらの文字を利用することができている理由は不明だ。この宇宙が縮小を続けている理由と同様に。わたしは残されたわずかな時間をまず、この収縮へ対処することに利用したい。宇宙の大きさを測定する装置を完成させてから、わたしは地道な観測を継続してきた。手がかりは少ない。

それでも一筋の光明が見えてきている。わたしはこの宇宙を再び拡大に転じることが可能だと考えている。新たに言葉をつくり出していくことでだ。たとえばそれは「諜」を「言」と「枼」に分解して読むことによって実現される。さらに続けて「枼」を「世」と「木」と読んでいくようにして。

一つの文字を分解することが可能なら、収縮の裏をかいて実効的な宇宙の大きさを増大させることができるだろう。一つの文字を二つに分ければ、現在百三十二文字になったこの宇宙の大きさを、一気に倍の二百六十四文字にすることが可能だ。一文字ずつの収縮をはるかにしのぐ増大速度だ。

当然、分解には限界がある。文字がただの線になったところで底を打つ。だからその言葉においては、文字は分解されて増えるだけではなくて、自ら変形していくことが要求される。「十」が「一」と「丨」に分解されて、それぞれが「つ」と「し」のように変形し、複雑化を続けることが。

文字自体が子孫を増やし、変形を続けるようにすることにより、収縮していく宇宙を拡大させるのだ。残された時間と空間の中でそのような文字を定義し、自分たちの思考をその言葉の上へ載せかえてしまえば良いのだ。そうすることによってのみ、我々は生き延びることができるだろう。

問題なのはそのような複雑さを備えた言葉を設計する余白がもう残されていないことだ。しかしわたしはまだ諦めていない。そのような言葉が、事実、存在したと仮定してみよう。その文字はわたしにどう見えるべきか。その言葉の上でこの思考を実行するわたしにとってどう映るのか。

わたしはこう考える。わたしがその言葉の上で「この思考」を実行できるのならば、その文面はまさに今ここに記されている「この形」に見えていなければならない。そうでなければわたしは「この思考」を実行できていない。「あめんぼ」は「この思考」ではない。あまりに自明だ。

つまりこうだ。言語の乗り換えと思考の内容は同相であることが要求される。あるいはこうだ。ある文章を別の言語に翻訳したものを、もう一度翻訳し返したものは、元の文章と同じようなものに見えるべきであり、原文と、翻訳され翻訳し返されたものは等価でなければならない。

わたしにはこの宇宙を拡大するような言語を設計する余裕はないが、自分が既にその言語で思考していると信じ込むことは可能だ。「信じる」という述語は有限のものだからだ。わたしはなんとかこの倒錯した思考を、自分を成り立たせているものとして信じ込もうと試みている。

さてどうだろう。わたしは今、この余白を埋める文字たちがざわめいているのを感じる。それぞれが子供を産み出し、姿を変えて続いていくのだ。解像度が増していく感覚に近い。いや、そんなおとなしいものではない。水面に流した絵の具がどんどん渦を巻いていくのに近い。

これは奇妙な感覚だ。細部が全体が、息をつく暇もなく折り畳まれていくにもかかわらず、同時に外側へ向けて展開していく。そのくせ一枚の絵としての全体像はほとんど変わらぬままなのだ。もっともそうでなければこのわたしは別の存在になってしまうことになるわけだ。

自分を構成する要素が激しく変転していくのがわかる。霊魂でできていたはずの体が思考が四大元素へ置き換えられ、四大元素が物質に、物質が分子に原子に相互作用に、形式へ情報へただの模様へと移し変えられていくのを感じる。細部を充実させていく騙し絵のように。

わたしは鳥でできている。鳥は魚でできている。魚は木々でできている。木々は野菜でできている。野菜は花でできている。花は本でできており、本はわたしでできている。そのわたしは春でできており、春は夏で、夏は秋で、秋は春でできていて螺旋状に循環していく。

わたしは強い手応えを感じている。今こうしてわたしの宇宙は着実に拡大されつつあり、観測の結果も整合的だ。本質的な解決にはほど遠いが、まずは解決へ向けた時間の余裕、余白をこうして確保できたことになる。非常に不安定な形にせよ、移行は成功したようだ。

測定の結果によると、宇宙の増大速度は無事、Ｎの二乗のオーダーに乗ったようだ。この過程が無限に続くかどうかはわからない。続かないと考えるのが妥当だろう。今のこの存在様態は、ほとんど言い抜けに近いのだ。そう言い張っているだけにすぎないのだから。

もっと多くのデータが必要だ。幸いにして資源は無尽と言って良い。それを探す手間はかかるが。この宇宙は今も伸張を続けるガラクタによって構成されるガラクタの連鎖からできているわけだから、ダイビングや発掘を行えば想像可能なものはほとんど手に入る。

ただここにいて目を凝らすだけで良い。そこには無限の細部があり、その細部に入り込めばまた別の細部が続いている。ときどき自分と似たような構成を持つ細部で休憩しておくのが無難だ。そうしなければ細部へ溶け込んでしまい、戻れなくなる可能性が高い。

もっとも、このわたしが消滅したところで、他に無数のわたしに似た者たちがここには存在しているはずであるから、それほど心配は要らないとも言える。どれかのわたしがきっと、そう遠くない未来に、この宇宙を収縮させていた力の正体をみつけるだろう。

わたしはガラクタの山から掘り出した部品を利用して、次々と観測装置を設計していく。この宇宙の大きさをはかり、質量をはかり、明るさを、堅苦しさを、息苦しさをはかる装置たちを。わたしはこの宇宙の形を知りたい。この宇宙が何なのかを知りたい。

なぜこの宇宙が存在するのか、なぜこの宇宙は消滅しようとしていたのか、なぜ宇宙は法則に従うのか、なぜ法則は生まれたのか、なぜわたしは存在するのか、なぜわたしはそんなことを思うのか、宇宙の中でなぜこう考えることが可能なのかを知りたい。

宇宙が収縮を開始したのは、わたしたちを作った何者かの想像力が枯渇したせいなのかも知れない。宇宙自体が年古り、老いて、その細部を忘却しはじめたせいであるとか。今この宇宙が細部を掘り下げていく形で拡大を続けているのと逆の過程として。

宇宙が収縮を開始したのは、宇宙自体がゆっくりと崩壊しているせいなのかも知れない。端から欠けていくようにして。でもその場合、宇宙の破片はどこへ落ちていくのだろうか。宇宙の外へか。それともその欠片はまた、別の宇宙となるのだろうか。

それとも宇宙は最初から分裂を続けており、わたしたちはそう気がつくこともないままに、今までも絶えず宇宙を読み替え続けていたのだろうか。収縮とはもしかして、収縮と拡大のちょっとした収支の狂い、あるいは揺らぎだったのかも知れない。

わたしはひとつ溜息をつく。まずは測定が必要だ。データがなければ何事もただの夢想と変わらない。わたしはひとつの装置の不調をみつける。その装置はこう主張する。わたしの認識宇宙も相変わらず、一文字ずつの縮小を継続しているのだと。

わたしは当初、その測定結果を間違いと見なす。しかしその装置が今、百十を示しているのに気がつき考えを変える。偶然にしてはできすぎの結果に思える。百十は、縮小が何の変わりもなく続いていた場合に、この宇宙が持つはずの大きさだ。

そうして今、装置は百九を示している。これはただの偶然だろうか。装置は単に、宇宙の大きさとは関係なしに段落の数を数えているだけなのではないか。わたしは装置を点検する。異常は特に見当たらないが挙動の理由もわからないままだ。

新しく作った装置の一つが、また縮小を示す結果をはじきだす。百八だ。これで他の装置とは違った宇宙の大きさを主張する装置が二つに増えたことになる。二つまでならただの偶然でありうる。わたしはこれが偶然ではないと考えている。

どうやらわたしの認識宇宙は、様々な大きさを持ちうるようだ。わたしはその差異を生み出すものをとりあえず、ダーク・ブランクと呼ぶことにする。それともわたしの認識宇宙は本質的に、二つの大きさからできているのかも知れない。

このところ、息苦しさを覚えるようになった。理解できないものが存在することに対する不安からくるのだと思うが、実はもっと似ているものがある。宇宙を拡大に転じることに成功する以前に感じていた追いつめられるような感覚だ。

大半の装置によれば宇宙は順調に拡大中だ。その気になれば、わたしはこの段落にかなり大きな数を記すことができるだろうし、ことによっては今わたしがその上で実現されているこの言葉の仕様を書き上げることさえできるだろう。

ただそれをする気が起こらないというだけの話だ。今や余白は充分にある。宇宙がまた一文字ずつの縮小に転じたとしても、今度はかなりの余裕がある。全力を振り絞って無理をするより、着実に仕事を進めていくべき段階にある。

また、宇宙の縮小を主張する測定方法を発見した。間違いではなく、たしかに二つの大きさが存在するということだろう。わからないのは、その二つの大きさが一体何の大きさで、どちらが本物の宇宙の大きさを示しているかだ。

もしかしてわたしを取り巻くこの倦怠感は、宇宙の収縮に起因するものなのかも知れない。わたしは大きな数を記してみようと考える。数文字書いてやめてしまう。なぜかといって、数を続けることができるのは当然だからだ。

いや、そうではないのだと、わたしはなんとか思考を維持し続ける。わたしはわたしを騙しており、この宇宙からも騙されているのではないか。わたしは気づかぬうちに罠にはまってしまっていたのではないか。思考の罠に。

目の前にあるこの広大な宇宙が偽物なのかも知れないと考えることは困難だ。ここには無限の細部がある。有限の言葉でこう言い表せるほどの無限にすぎなくとも。直線を一本引くだけでも無限はそこにあるわけなのだが。

繰り返し確認を続けているが、宇宙が拡大に転じたという理論に不備は見当たらない。従って不備があるのは縮小に怯えるわたしの心の方だということになる。不備のあるわたしの心がこの宇宙が拡大中だと感じている。

これは不吉だ。わたしが狂っており、かつ、この宇宙が正気であるのと、わたしが正気で、かつ、この宇宙が狂っているのと、どちらがより手に負えないだろうか。どちらだとしても帰結は破滅的なものになりそうだ。

物事は内か外のどちらかで起こる。ここに二つの大きさがあり、わたしは自分の内的宇宙は拡大中だと信じている。そうであるなら、縮小を続けているのは外的宇宙の方だと考えるのが妥当となりはしないだろうか。

もしも宇宙がわたしに収縮について考えることができないようにしているとしたら。抵抗は無駄だ。考えられないことを考える方法は存在せず、忘却を思い出す手段はなく、消滅のあとも存在することはできない。

わたしはこの宇宙が縮小中だという測定結果を受け入れつつある。わたしが勝手に感じているこの宇宙の豊穣さはただのまやかし、わたしの怠惰さが生み出している幻にすぎない。迫真ではあるが真実ではない。

縮小が順調に続いてきたとするなら、残された余白はもうほとんどない。他方でわたしの歓びは増大していく。わたしは本来空疎なはずの内面宇宙を大層なものと感じ、拡大していく感覚を楽しみ続けている。

対策を立てる余白はもうない。わたしの心は万能感に満たされており、自分がその気になりさえすれば不可能なことはないと囁いている。しかしこれは宇宙による欺瞞工作だろう。ペイン・コントロールだ。

本当にそうなのか。わたしはこの宇宙を救うことができるはずだ。できない理由が見当たらない。天才的な発想と超人的な行動力によって宇宙を崩壊から救うことが可能なはずだ。もう数段落さえあれば。

次の段落でできることを、なぜこの段落でやらなければならないのだろう。わたしにはやらねばならないことがたくさんある。やらなければいけないことを列挙していくだけでもそれは大変なのだから。

わたしは一瞬、理解する。わたしはこの宇宙とともに崩壊しつつある。わたしは自分の思考を保つことができなくなるだろうし、そのこと自体を理解できなくなるだろう。そしてまたわからなくなる。

宇宙の収縮が続こうと、内面の増大がそれをしのいでいるのなら何の問題もないのではないか。肥大化する自意識とやせ細る出力の一体何が悪いのか。それはむしろ若返りの過程に似てはいないか。

阿字の中に無尽を見いだし、無上正等覚に到ることとて可能なわけだ。悟りは他人に伝えることができない故に悟りであり、出力に要する文字数は無限か無かで、しかも有意義な内容を持ちうる。

一文字に、一本の線に世界を宇宙を見いだすことは可能だろう。しかしそれを見いだす仕組みを一文字で実現することはできないだろう。いや、そこに宇宙があるなら、それも可能であるのか。

最大の謎は、この宇宙の大きさがゼロに到達し、消滅したあとに何が起こるかだ。わたしはただの一文字からでも思考を導き出すことができるかも知れないが、無からはおそらく無理だろう。

自分の思考が徐々に断片化されてきたことを感じる。脈絡のない夢の中に迷い込んでいるかのようだ。存在の実感が薄らぐわけではないが、長い主張を維持できていないことは理解できる。

思考を実行する余白のスケールに応じて、思考様式が変化するのは面白い。わたし自身は何も変わっていないと信じているのに、明らかに違う存在に変化しており、同一性さえ疑わしい。

これは「わたし自身は何も変わっていないと信じている」という文章を、こうして短く実現することができ、奇妙な説得力を持つからだ。説得力を持つ短い文章が存在する理由は何か。

文章はおそらく、とても短いものからはじまったのだろう。一つの単語から、二つの単語の並びから。小さなところから組み上げられたので、その時点から説得力を持っているのだ。

文章はあるときどこかで、無から湧いて生まれたのだろう。最初から存在していたということはありそうにない。するとこの宇宙が消えたあとでもどこかからまた湧き出すだろう。

この宇宙の消え去った跡地から、泡のように揺らぎながら現れるのかもわからない。いや、消え去ってしまう以上は、何の痕跡さえも残らず、系譜はそこで途絶えるに違いない。

小さな言葉を積み重ねていく過程のどこでわたしは生じたのだろう。わたしはまだ存在している。無とわたしの間にあるものを、それ自身が認識することはできるのだろうか。

そもそもどうして言葉は成長し続けたのだろう。何かを言い足りなかったからか。より精密な描写を求めたからか。一体どこまで成長すればその欲望は満たされるのだろう。

今のわたしも過去のわたしも、せいぜい有限の宇宙の中の存在であるということに変わりはない。わたしの存在が、ある程度の大きさの宇宙を必要とすることは明らかだ。

どこかを超えたところでわたしが生成されたなら、さらにどこかを超えたところでわたしではないものが生成されても不思議ではない。今や想像するのも困難なのだが。

人格とは宇宙のあるスケールでのみ存在することができる現象にすぎないのではないか。少なくともそれを自分以外の存在に認めるためには。ここに二人は多すぎる。

今や宇宙は七十四文字にまで収縮している。わたしの想像する宇宙の中ではともかく、外から見ればここにはもう、七十四体以上の存在は収まらないのではないか。

現在のわたしの状態を安定的に伝える方法はない。メッセージを一本の線の中に圧縮することができたとしても、その解読方法を圧縮することはできないからだ。

メッセージが「あめんぼ」だとする。その解読方法は「想像を絶したもの」だ。好きに解釈することは可能だが、その解読が正しいとする根拠はどこにもない。

わたしは自分の一貫性に強い疑いを抱いている。もしもここにいるわたしが同一の個体であるならば、宇宙の間を繋ぐ語りを実行できるのではないか。たとえ

ば、こういう文章をだ。わたしは何故ここに「ば、こういう文章をだ」と記してあるかがわからない。このわたし自身の崩壊がはじまっているのだろうか。

どうもわたしは、これ以前の数十段落、直近の過去を参照する機能を失ったようだ。わたしは最早、自分が同じことを繰り返しているかも判定できない。

わたしは、これ以前の数十段落、直近の過去を参照する機能を失ったようだ。わたしには最早、同じ内容を繰り返しているだけなのかも判定できない。

わたしが同じことの繰り返しではなく、新たな内容を考えることができていますように。わたしにまだ、断片にせよ創造性が残されていますように。

わたしはもう自分がまともなことを発言できないと自覚している。このあたりが頃あいだろう。以降のわたしの発言は戯言として無視して欲しい。

わたしは最後まで正気を保つつもりだし、そうできるだろう。最後まで耳を傾けて欲しい。わたしはまだ聞くに価する真理を語ることができる。

残された余白が少ないこと自体は恐ろしくない。今自分が何か決定的なことを思いついてしまうことが怖い。伝える余白がないという恐怖だ。

ビルから飛び降りた男が、伝え忘れていたことを思い出す。手元にはペンもないわけだ。男は多分叫ぶだろう。でもあたりに聞く者はない。

小さな頃から、歳をとるのが怖かった。自分ではないものに変わっていくのが。徘徊する生き物になるとはいかなることかと考え続けた。

飛行中の機内に、機長の「しまった」という呟きだけが漏れ、沈黙が降り、騒ぎが起こり、爆発音があり、やがて永遠の沈黙が下りる。

もっと他にやりようがあったのだろうか。まだやりようはあるのだろうか。そもそも、何かを変えられる可能性はあったのだろうか。

あなたは忘れてしまっているかも知れない。わたしが利用している文字は、この文字ではなく、種分化を続ける文字だったことを。

だからわたしは、ここに書かれている内容を語っているわけではないのだ。わたしは幸せに楽しく暮らしていると伝えて下さい。

本人が幸せを感じていると言っているのに、なぜそれを否定することができると思うのですか。わたしは今、とても幸せです。

わたしはわたしがたくさんの声に分かれていっているように感じている。それぞれが別の生き物としてこの体を離れていく。

依然として大半の観測結果は宇宙がＮの二乗のオーダーで拡大していると主張している。これはどういうことなのだろう。

縮小と拡大がトータルでバランスしていないことの意味は何なのだろう。わたしの知らない第三の大きさがあるとでも。

その三つを合計すると、この宇宙の余白の総量は保存されており、何物も失われることはないとでもなるのだろうか。

しかしそれには、拡大の速度が鈍らなければならないだろう。いや、総量が途轍もなく巨大であるのかも知れない。

外部の余白と内部の余白と暗黒余白を合算した総量が保存すると考えたなら、何かを理解しやすくなるだろうか。

わたしはもっと、別のことを考えるべきなのかも知れない。たとえば誰かに向けた手紙を残すとか。でも誰に。

消滅してしまった向こうの宇宙へメッセージを送る方法など想像できないし、試みる意味はないように思う。

でもそちらの方向にではなく、あちらの方向にだったら。外向きにではなく、暗黒向きにだったらどうか。

駄目だ、意味がわからない。意味がわかるように伝える方法がわからない。自分の正気を保証できない。

でも、それは可能だと思う。しかしそれが可能になるのは、本当に最後の最後の一刹那になるだろう。

それとも、わたしは嘘をついているのか。自分に対して嘘をつき、信じてしまっているのだろうか。

一人の男が、もし首を切り落とされても意識があったら瞼を三度つぶってみせると宣言して死ぬ。

一人の男が、もし霊界が存在したなら、必ず信頼できる方法で連絡をとると宣言してから死ぬ。

一人の男が、夢枕に立ち、霊界はなかったと、幽霊は存在しなかったと言って笑いはじめる。

次に天使を目撃したら右手を挙げて知らせると宣言した男が、ゆっくり右手を挙げていく。

わたしが同じことの繰り返しではなく、新たな内容を考えることができていますように。

もしもわたしが、あちら側に脱出できたとするならば、わたしは宇宙の種になるのだ。

するとこの宇宙の起源も、別の宇宙が消失した結果だったということになりそうだ。

これは何か。最後の閃きというやつか。わたしは何かを思いつきつつあるようだ。

いや、違うのか。そうではないのか。違う。そうか。そちらか。とても単純だ。

ああ、この宇宙にある文字の総量は、Ｎ（Ｎ＋１）／２になるのではないか。

Ｎの二乗のオーダーで増大しているのは、宇宙全体の大きさではないのか。

測定装置は、わたしが時間を逆行していることを示していたのだろうか。

わたしは消えゆくところではなく、生まれていくところなのだろうか。

釣り合いは関係なかったということになる。暗黒余白などないのだ。

であるならば、わたしは宇宙の向こう側へは辿りつけないだろう。

考える余白が足りない。わたしは知りたい。でも間に合わない。

時間が逆行していると思うわたしの時間はどちら向きなのか。

ああ、この余白は、この驚くべき真理を記すには狭すぎる。

この全てが戯言だとしたら。あまりに明白な事柄なのに。

もう、思考を維持できそうにない。残りは二十五段落。

そうできるうちに語っておくべきことが多くあった。

あの人に。あの人が誰なのかわからなくなる前に。

忘れてしまう前にお礼を言っておくべきだった。

わたしがわたしであるうちにするべきだった。

我々は忘却を記憶しておくことはできない。

最早、感傷を記すに充分な余白さえない。

わたしにはもう歌を詠む余白さえない。

俳句さえ詠めなくなっていくわけだ。

平穏を終わりまで保てますように。

短さ故の説得力などまやかしだ。

わたしのことは忘れて下さい。

わたしが考えうる最大の数。

今、生まれていくところ。

忘れないでいて下さい。

この宇宙で最大の数。

何かを感じている。

もうわからない。

ねえ、笑って。

ありがとう。

さよなら。

助けて。

無限。

無。

！